

#### 【4-10 SRレポートのまとめ】

##### CQ10 妊娠中の乳がん患者に手術は推奨されるか？

アウトカムは早産率、流産率、奇形合併率、乳癌無病生存期間(DFI)、乳癌生存期間(OS)の5つである。研究対象集団は妊娠中に乳がんと診断された症例であり、全例が妊娠中に手術療法を施行されていない背景のばらつきがある。対照群は非妊娠期乳がん症例もしくは非乳がん(正常)妊娠症例、もしくは乳がん既往妊娠症例であり、対照にもばらつきがある。また本CQを検討するには妊娠期乳がん症例に手術療法を施行しない症例を対照とすべきではないかと思われ、対照がCQと異なる可能性もある。

早産率を評価した3報告はいずれも対照と比較して上昇する。しかし、3報告の早産は乳がん治療目的に妊娠の早期中断をするために介入した分娩誘発による(総合判断による)早産である。1報告で周産期合併症として早産を報告しているが対照群との比較検定をしていない。よって、妊娠中に手術療法をすることで周産期合併症としての早産率が上昇するエビデンスは認められなかった。

流産率の報告は4報告だが、すべて症例集積である。0例が2報告。他2報告は130例中6例(4.6%)(Cardonick)、14例中5例(35.7%)(Gomez)だが詳細不明。症例数も少なく、本検討から、妊娠中の乳がん患者に手術療法を施行することで流産率が上昇するエビデンスは認められなかった。

奇形合併率を評価した報告は3報告であったがいずれも症例集積である。2報告は22例中0例、1報告は130例中4例であり、いずれも化学療法をした症例であった。手術療法の併用の有無については詳細不明である。よって、妊娠中に手術療法をすることで奇形合併率が上昇するエビデンスは認められなかった。

無病生存期間(DFI)を評価している報告はないが、DFIの代替としてRFS,PFSを評価している報告が1報告ずつある。対象群28例中26例で手術療法を施行しており、RFSを検討している報告(Ezzat)において対照群と比較して有意差がない。PFSを検討している報告(Ibrahim)では対象群72例中手術療法を施行された症例は10例であり、対照群と比較して有意差がない。以上より妊娠中の手術療法を施行した症例のDFIの検討は報告がなく、RFSについての検討は対照群と比較して有意差はないが症例数が少なくエビデンスとしては弱い。よって、妊娠中に手術療法をすることに関するDFIのエビデンスは認められなかった。

乳癌生存期間(OS)を評価している報告はEzzat, Izrahim, Framarino-Dei-Malatesta Mの3報告である。妊娠中に乳がんと診断された症例を非妊娠乳がん症例の対照と比較した3報告ではOSで有意差がない。妊娠中に手術療法を施行した症例におけるOSを検討している報告はFramarinoの1報告で、症例数が少ない。よって、妊娠中に手術療法をすることに関するOSは対照群と比較して有意差がないとする報告はあるがエビデンスは弱い。